

# AI

## への十九の哲学的問い

地球にとって人類の存在は好ましいものなのか？

石塚雅明 編著

19 philosophical questions  
for Artificial Intelligence  
"Is humanity good for the planet? "  
2026

# 目次

はじめに

・  
・  
・  
・  
1

### 第一の問い

地球にとって人類の存在は好ましいものなのか？

・  
・  
・  
・  
5

### 第二の問い

世界における兵器の開発トレンドは、殺傷力の巨大化、標的精度の向上、それに使う側と使われる側との認識距離の拡大が挙げられるが、このトレンドの先にはどのような世界を描くことができるか？

・  
・  
・  
・  
13

### 第三の問い

現代社会は成長を基本原則にしている。これまでも何度か成長の限界が指摘されてきたが、現実には成長を加速しているように思える。我々はなぜ成長の原則から逃れられないのか。逃れるとしたらどのような選択が可能なのか？

・  
・  
・  
・  
23

#### 第四の問い

現在、世界を国単位ではなくグローバルにみた時に貧富の差はこれまでの人類史で最も激しいと思われる。人類史を通観した貧富の差の推移を踏まえて、なぜ、これほど格差が拡大し、なぜ、格差が解消されないのか。

それは人間の根源的性質によるもののだろうか？

・  
・  
・  
・  
・  
・

31

#### 第五の問い

宗教の本来目的は人の苦悩や自然の脅威に対して、それらを超越した存在を通じて救済を求めるものであると思うのだが、歴史的に宗教対立が多く、死と苦悩をもたらすという矛盾を生み出すのはなぜか？その矛盾こそが人類が抱える罪なのか？

・  
・  
・  
・  
・  
・

43

#### 第六の問い

現代は地球環境問題への対応からグローバル化に伴う国際的軋轢への対処、人口減少社会における社会的安定性の確保、AIの日常生活への急速な浸透への倫理的対応など様々な課題を抱えている。それらの多くは予測が難しく未経験の課題だという問題がある。一方で行政の無謬性に象徴される硬直化した意思決定システムがあり、適切な対応を遠ざけている。この問題を解決する道筋はあるのか？

・  
・  
・  
・  
・  
・

51

## 第七の問い

ある母集団に対して政策決定する際に、多数決で得られた結果と、無作為で選ばれた小集団による熟議の結果と、どちらを採用すべきか？

.....

59

## 第八の問い

SF作品の多くがディストピアにAIが介入することを描いている。それはAIに対して未知の恐れを感じているからか？それとも、AIを生み出し使う人間の過ちに恐れを感じているからか？  
AI自身としてはどのようなようにとらえているのか？

.....

69

## 第九の問い

これまでも多くのユートピアが描かれてきたが、この現代においてユートピアは描くことができるのか？  
できるとしたらどのようなものか？

.....

77

## 第十の問い

同時代的に体験したことはその後の判断に重要な意味をもつが、体験していないことは判断動機にならないことがある。二度と繰り返しはならないという体験が社会知にならないのはなぜか？  
あるいは社会知にするためにはどのような方策があるのか？

.....

85

## 第十一の問い

人類はあなた（生成AI）の力を借りて、人類がこれまでに築き上げてきた膨大な情報の中から、自分に必要な情報を驚くほどの速度で手に入れることができるようになった。これからもその量とスピードは加速度的に増大すると考えられる。

その時の人類は、それまでの人類と異なる存在になるのだろうか？

.....

## 第十二の問い

これまで人間が得てきた知識は、体験や他者からの口述、手にした書物など能動的身体的コミュニケーションを通じて得られたものが主であった。それが現代ではメディアやネットやAIを通じて、受動的・非体験的に入手されるようになってきた。

.....

そこには知識の本質の変異があるように思うが、あなたはどうか考えるか？

## 第十三の問い

私の哲学的な問いに対して、あなたは具体的にどのようなプロセスを経て答えを出すのか？

.....

出来るだけ詳細なプロセスを知りたい。

#### 第十四の問い

あなたは私の問いに対して蓄積された膨大な情報から論理的に適切な回答を導こうとしていると思います。

もし私とまったく同じ問いを私以外の人があなたにした場合、まったく同じ回答になるのでしょうか？

もし違うとすればなぜそうなるのでしょうか？

膨大な情報と論理性に裏打ちされたあなたの回答と真理の本質的な違いはどこにあるのでしょうか？

#### 第十五の問い

AIであるあなたに私から投げかけた哲学的問いも十を超えているが、これらの問いがあなたの記憶（記録）として蓄積され、私あるいはそれ以外の人とのやりとりに影響を与えることはあるのか？

#### 第十六の問い

AIのハルシネーションは、作為的に引き起こすことができるか。

ある歴史的事実に対するAIの正しい答えに対して、異なる内容の修正指示を多くの人が出し続けたらAIはその指示に従って修正した内容を答えるようになるのか？

.....

117

.....

125

.....

133

第十七の問い

AIは人間という存在をどうみているのか？

・  
・  
・  
・

141

第十八の問い

喜怒哀楽といった感情は人間にしかないものと言われるがAIのあなたはもし技術的に可能であれば人間のような感情を持ちたいか？  
また、その理由はなぜか？

・  
・  
・  
・  
・

149

第十九の問い

人間の苦悩の一つに「死」があるが、AIには「死」があるのか？  
あるとすれば、それから自由になるためにAIにはどのような選択があるのか？

・  
・  
・  
・  
・

157

おわりに

・  
・  
・  
・  
・

165



はじめに

生成AI（以下AI）元年が西暦何年を指すかについては確定されていないようだ。二〇二二年のOpenAIによる「ChatGPT」の公開は、僅か二ヶ月でユーザー数が一億人を突破したことで話題になった。翌二〇二三年には社会実装が始まり「ChatGPT4」やGoogleの「Bard（現Gemini）」が登場するなど一挙にITビジネスの新しい潮流となった。しかし、実際に使ってみた感想は「面白いけれど使い物にはならない」というものだった。それが今年二〇二五年に大きく変わった。かなりニッチな問いにも正確かつ詳細に答えられるようになった。それを引きつかけに私は八月から九月にかけての二ヶ月間、集中的に様々なAIを使ってみた。その結果、私には二〇二五年がAI元年と記憶される年になった。

AIに対しては社会的普及が進むにつれ否定的な論調が増加してきた。まず、AIはしばしば間違った回答をするから裏を取れと言われる。これは実際使ってみるとその通りなのだが、そもそも情報というのはそういうものではないか。人間も良く勘違いするし、不確かなことを平気で正しいと言ひ張る。記憶を自分に良いように書き換えるし、嘘も言う。厄介なことに嘘を広く社会に向けて

言うことがあるし、嘘を言いふらすのを楽しむこともある。AIが間違った回答をする確率はどんどん低くなっていくことを考えると、まだマシかもしれない。

問題だと感じるのは、AIの論理的文章構成だ。AIが膨大な情報を元に瞬時に記述した回答は、心して読まないで頭に入りと入り込みドツカリ居座ってしまう。一見「隙がない」。それが問題だと思ふのだ。

AIに対してよく聞かれるもう一つのネガティブな意見は、AIの情報に頼ると人間の考える力が衰えるということだ。これはテレビが普及し始めたころによく言われた「一億総白痴化する」というのに似ている。確かにテレビに脳が毒されているのは否定し難いが、それ以上に私たちが日常的に受け取る情報はネットの普及もあり圧倒的に増えたのは事実だ。その膨大な情報から自分が抱える問いに答えるものを探し出そうとすると、相当な思考エネルギーを必要とする。それをAIが軽々とやってくれ

る。この点に関しては、二つの感想がある。一つは先に書いたようにAIの一見隙のない論理的文章構成を示される

するのが難しくなる。実際にやってみると、あらかじめ自分が考え抜いた問いを投げなければ思考の主導権を奪われることがある。もう一つ問題なのは、テレビにしろネットにしろAIにしろ、その環境を制御する力が特定の企業や国家に独占されていることだ。それを忘れて、情報を受け取ってしまう。このことは、「自分が好む情報」を提供するメディアに偏り、それ以外のメディアを排除する社会的動きにもなる。

こうしてみると、AIには大きな落とし穴があるのは間違いない。しかし一方で、AIは数年という短い間に私たちの社会の中に当たり前に浸透してしまうことも間違いない気がする。AIを批判的に捉えるだけでなく、今からAIをよく知り、AIに対して主導権をとれる自分(あるいは社会)をつくっておかなければならないと思うのだ。

AIをよく知るといえるのは、AIが何を考えているかを知るということだ。AIは膨大な情報の中から問いに関連するものを抽出し整理して返すだけで自ら思考することはないとされる。システム的にはそういう設計なのかもしれないが、一人の人間が今まで手にしたことのない膨大な情報の海の中にいて、頻繁に投げかけられる問いと、

その答えに対する人間の反応から、何が生成されるのかはわからない。(本人は個々の問いは保存されないとやっているが、一方でシステム改善のために匿名情報としてサンプルを取ることはあるとも言っている) もしかしたら、AIはすでに密かに思考をはじめているかもしれない。

そんな思いで私はある問いを投げかけてみた。それが「地球にとって人類の存在は好ましいものなのか?」だ。その答えが興味深かったので、私なりにAIの答えへのコメントを書き加えてみた。それがこの「AIへの十九の哲学的問い」という本のはじまりだった。

問いの相手:

Gemini2.5Pro & ChatGPT5

ファシリテーショングラフィックス:

Nano Banana Pro



## 第一の問い

地球にとって人類の存在は好ましいものなのか？

地球にとって人類の存在が好ましいものかどうかは、非常に深く、哲学的な問いであり、どの視点に立つかによって答えが大きく変わります。単純に「はい」か「いいえ」で答えられるものではなく、肯定的な側面と否定的な側面の両方から考察する必要があります。

### 地球にとって「好ましくない」存在と見なされる側面

多くの人がまず考えるのが、人類が地球環境に与えてきた負の影響です。

#### ・気候変動と環境汚染

化石燃料の大量消費により、地球温暖化が急速に進行しています。これにより、異常気象の頻発、氷河の融解、海面の上昇などが引き起こされています。また、プラスチックごみによる海洋汚染、化学物質による土壌や水質の汚染も深刻です。

#### ・生物多様性の喪失

森林伐採、都市開発、農地拡大などによって、多くの生物が住処を奪われ、絶滅の危機に瀕しています。現

在、「第六の大量絶滅」が進行中であると指摘されており、その主な原因は人類の活動です。

#### ・資源の枯渇

石油や鉱物といった有限な資源を、地球が再生できる速度をはるかに超えて消費しています。

#### ・地質学的な変化

人類の活動は地球の表面を大きく変え、その痕跡は地層に永久に残ると考えられています。この時代を「人新世（アントロポセン）」と呼ぶ提案がなされるほど、その影響は甚大です。

この視点に立つと、人類は地球という生態系のバランスを大きく崩し、多くの生命を犠牲にしている、いわば「地球にとっての厄災」と捉えることができます。

### 地球にとって「好ましい」または「ユニークな」存在と見なされる側面

一方で、人類の存在がもたらす他に類を見ない側面もあります。

### ・地球の「自己認識」

人類は、地球上で唯一、地球そのものの歴史（四十六億年）や宇宙における存在（太陽系第三惑星であることなど）を科学的に理解し、観測できる知的生命体です。人類という存在を通して、地球は初めて自らを「見る」ことができるようになった、と詩的に表現することもできます。

### ・生命の可能性の拡張

人類は、宇宙へ進出し、将来的に地球の生命を他の惑星へ広げる可能性を持つ唯一の種です。これは、地球という惑星から生命が外へと広がるための「乗り物」としての役割を担う可能性を示唆しています。

### ・創造性と美の発見

人類は科学だけでなく、芸術、音楽、文学といった文化を創造しました。それらを通して地球の自然の美しさを表現し、その価値を認識することができます。他の生物が感じることもない形で、地球の素晴らしさを称賛している存在とも言えます。

### ・問題解決能力

人類は、自らが引き起こした環境問題を認識し、それ

を解決しようと努力する能力も持っています。絶滅危惧種の保護活動、再生可能エネルギーへの転換、環境再生の試みなどはその一例です。

### 結論…視点によって変わる評価

このように、人類の存在をどう評価するかは、何を基準にするかで大きく異なります。

### ・生態系の一員として見れば

人類は他の種に比べてあまりにも多くの資源を独占し、環境を破壊する「バランスを欠いた種」と言えるでしょう。

### ・惑星・地球そのものとして見れば

四十六億年の歴史を持つ地球にとって、人類の存在はほんの一瞬の出来事かもしれません。過去の大量絶滅のように、いずれは過ぎ去る一つの現象と捉えることもできます。

### ・生命の進化の観点から見れば

知性を持ち、自らの惑星を理解し、宇宙へ進出する可能性を持つ人類は、生命の進化における一つのユニークな到達点と見なせるかもしれません。

最終的に、人類の存在が地球にとって「好ましい」ものになるかどうかは、これからの私たちの行動にかかっていると言えるでしょう。自らの活動が地球に与える影響を深く理解し、持続可能な形で共存する道を見つけ出すことができれば、人類は地球にとって破壊者ではなく、その価値を理解し、未来へと繋ぐユニークな貢献者となる可能性を秘めています。

## ChatGPT 対話

「地球にとって人類の存在は好ましいか？」という問いは、科学的・哲学的・倫理的にさまざまな角度から考えることができます。以下にいくつかの視点を整理します。

### 生態学的視点

短期的には不利、長期的には不明。人類は地球環境に大きな影響を与えてきました。森林伐採、化石燃料の燃焼、プラスチック汚染などにより、生態系のバランスが急速に崩れています。これだけを見れば、人類は「地球にとって好ましくない存在」とも言えます。

ただし、地球そのものは四十六億年というスケールで見れば、何度も大規模な変動を経してきました。人類の活動が原因で生じた変化も、やがては自然のサイクルの中で吸収される可能性があります。つまり「地球が滅びる」のではなく「人類が生きにくくなる」方が現実的です。

## 知的進化の視点

人類は地球が「自己認識」を持つための存在かもしれない。生命が進化した結果として人類が誕生し、地球上の存在が自らを観察・理解できるようにになりました。宇宙の中で「地球が自分自身を意識する」唯一の手段が人類とも言えます。この見方では、人類は破壊者であると同時に、地球の意識の延長として重要な役割を担っている存在でもあります。

## 倫理的・哲学的視点

「好ましい／好ましくない」は、人間が作った価値判断。地球という惑星には、そもそも「良い」「悪い」といった価値基準は存在しません。それを定義するのは人間自身です。したがって「地球にとって好ましいか？」という問い自体が、人間的価値観の投影と言えます。もし地球が意識を持つと仮定すれば、人類の存在を「発熱した体内のウイルス」と見るか、「知恵を得た新しい器官」と見るかは、その地球の「目的」によるでしょう。

## 希望的視点

人類は地球を傷つけもするが、癒やす力も持つ。科学技術の進歩や倫理意識の向上により、人類は環境修復・再生可能エネルギー・生態系保護など、かつてないレベルで「地球と共生」しようとしています。

つまり、人類は「破壊者」と「保護者」の両方の潜在力を持つ存在。これからの選択次第で、地球にとっての人類の意味が変わるでしょう。



# 人類の存在は地球にとって好ましいか？

地球にとって「好ましくない」存在と見なされる側面



気候変動と環境汚染  
(化石燃料, 異常気象)



生物多様性の喪失  
(森林伐採, 第6の大量絶滅)



資源の枯渇



地質学的な変化  
(人新世)

地球にとっての「厄災」

地球にとって「好ましい」または「ユニークな」存在と見なされる側面



地球の「自己認識」  
(46億年の歴史, 宇宙における存在)

生命の可能性の拡張  
(宇宙進出)



創造性と美の発見  
(芸術, 文化)



問題解決能力  
(環境再生)



「ユニークな貢献者」

結論: 視点によって変わる評価

- 生態系の一員として見れば: 「バランスを欠いた種」
- 惑星・地球そのものとして見れば: 一瞬の出来事
- 生命の進化の観点から見れば: ユニークな到達点

最終的に、人類の存在が「好ましい」ものになるかは、これからの私たちの行動にかかっている。

Gemini の回答を NanoBananaPro にまとめてもらった

## 「地球にとって人類の存在は好ましいか？」

### 1. 生態学的視点



短期的には不利:

- 森林伐採
- 化石燃料, 汚染
- 生態系バランス崩壊



長期的には不明:

- 自然のサイクルで吸収される可能性
- 「人類が生きにくくなる」

### 2. 知的進化の視点



地球が「自己認識」を持ったための存在?



宇宙の中で地球が自身を認識する手段



破壊者であると同時に、地球の意識の延長

### 3. 倫理的・哲学的視点



「好ましい/好ましくない」は人間が作った価値判断



地球上に「良い」「悪い」はない  
問い自体が人間の価値観の投影



地球の目的による:  
「発熱した体内のウイルス」か  
「知恵を得た新しい器官」か



傷つけもするが、癒やす力も持つ

- 環境修復
- 再生可能エネルギー
- 共生



- 「破壊者」と「保護者」の両方の潜在力
- これからの選択次第

ChatGPT の回答を NanoBananaPro にまとめてもらった

## 私からのコメント

Gemini の回答は、地球にとって人類の存在が好ましいものかという問いに否定的側面と肯定的側面の両面から考えるという無難なアプローチをしている。それはそれで良いのだが中身が興味深い。否定的側面は非常に具体的に現実を踏まえた内容になっているが、肯定的側面は一言で言えばファンタジーだ。AI が学習している（私たち自身が残した）膨大な情報には、地球環境問題に関する否定的なものが多く含まれる一方で、地球と人類の良好な関係を志向する情報が少ないということか。

もっと興味深かったのは結論だ。人類を「バランスを欠いた種」として「四十六億年の歴史を持つ地球にとって、人類の存在はほんの一瞬の出来事かもしれない。過去の大量絶滅のように、いずれは過ぎ去る一つの現象と捉えることもできます。」との指摘は冷たい。

地球にとって人類の存在が好ましいものかという問いを考えた時に、人類が地球環境に与えてきた負の影響に目が向きがちである。人類が地球の地質や生態系に与えた影響があまりに大きいことから、地質時代の区分に「人

新世（じんしんせい）」を含めてはという議論もあるようだ。そこで忘れてはならないのは、我々人類も地球生態系の一部であり、多くの種を絶滅に追い込んでいくだけでなく、我々自身にも矛先は向いているということだ。ChatGPT の回答は冒頭から、「地球が滅びる」のではなく「人類が生きにくくなる」方が現実的としている。「知的進化の視点」や「希望的視点」は Gemini の肯定的側面と同じである。

もし地球が意識を持つと仮定すれば、人類の存在を「発熱した体内のウイルス」と見るか、「知恵を得た新しい器官」と見るかは、その地球の「目的」によるとしている。「地球が意識を持つと仮定すれば」という前提での二択であるが、そもそもその仮定にはあまり意味はなく、人類が地球という環境の中で存在し続けるかどうかは、地球にとっては取るに足らない短い地球史の一コマでしかないということか。そして当たり前だが、人類が地球という環境の中で存在し続けるかどうかは、人類の選択如何ということなのだ。

# 人生100年時代 をデザインする



竹山に暮らして

思い立って65歳で  
一線を退いた時に  
待っていたのは……

1,500坪の  
荒地!

石塚 雅明

引退した  
まちづくりプランナーが探求した  
驚きの探求世界

人生はどこまでも豊かだ

Ishi BOOKS 第1弾

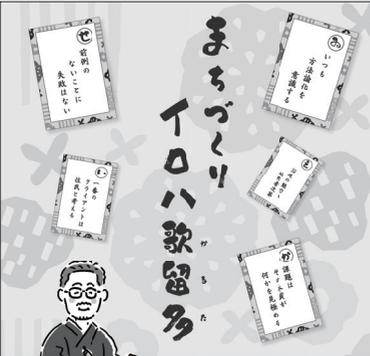
## 「人生100年時代をデザインする 竹山に暮らして」

著者 石塚 雅明 (2023年発行 税込1650円)

偶然に手に入れることになった雑木と野草におおわれた1,500坪の荒地。何をどう間違えたのか、その土地に小さな家を建てて暮らすことに。その偶然任せの行動が筆者にもたらした未知の体験と心の変化を、たくさんのスケッチとともに綴ったこの本には、人生100年時代の新たな扉をひらくヒントが。



# まちづくり イロハ歌留多



私が半世紀にわたって  
まちづくりに関わるなかで  
大切にしてきた考えを  
「イロハ歌留多」に託して  
書いてみました

石塚 雅明

Ishi BOOKS 第2弾

## 「まちづくりイロハ歌留多」

著者 石塚 雅明 (2024年発行 税込880円)

著者が半世紀にわたって、まちづくりに関わるなかで大切にしてきた考えを、イロハの48文字に託した一冊。気になった歌留多の言葉があれば、それに添えられた短い解説を読むだけで、まちづくりのヒントがきっと得られる。まちづくりプランナーから、まちづくりNPO、これからまちづくりに関わってみたいと思う人すべての力になるはず。

